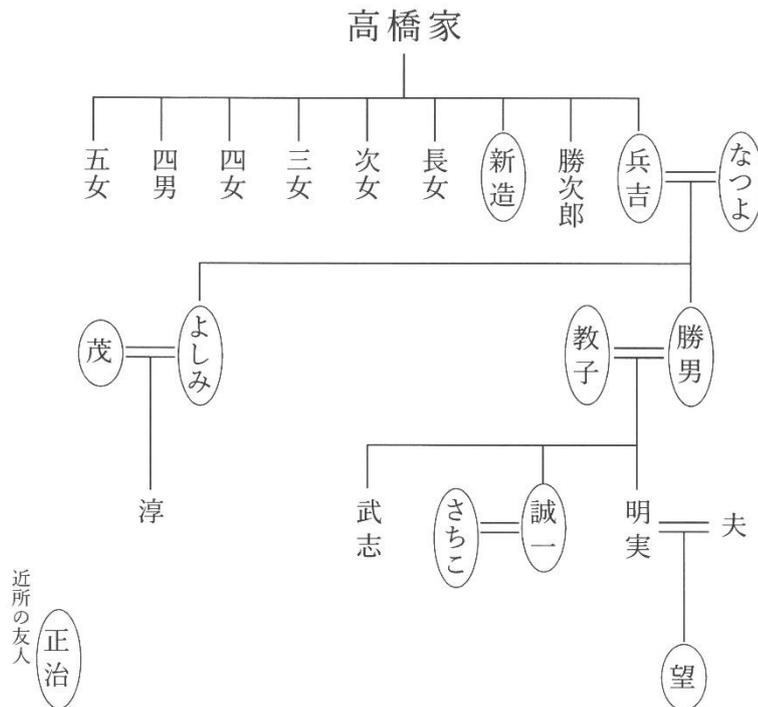


海辺のまちの、ちいさな家族の物語

『ファミリートツリー』

作
相澤一成



◇ 登場人物 ◇

- 高橋誠一（せいいち） 30代男性。故郷を離れて東京で俳優になった。姉・明実と弟・武志の三人兄弟。
- 高橋勝男（かつお） 誠一の父。兵吉となつよの長男。食品会社に勤務し、工場責任者だった。
- 高橋教子（きょうこ） 誠一の母。夫の勝男とのあいだに二男一女をもうけた。青森出身。
- 高橋兵吉（ひょうきち） 誠一の祖父。元漁師だが左腕が不自由になり、水産加工業を営んでいた。
- 高橋なつよ 誠一の祖母。その昔、農村から兵吉のもとへ嫁いできた。
- 斉藤よしみ 誠一の叔母。兵吉となつよの長女で、勝男の妹。
- 斉藤 茂（しげる） よしみの夫。とび職人。息子が一人いる。
- 菅野新造（しんぞう） 誠一の大祖父。兵吉の弟。妻を早くに亡くし、ずっとひとり暮らし。
- 小齋正治（まさじ） 勝男の飲み仲間。定年直前の消防署員。
- 村上 望（のぞみ） 誠一の甥。姉・明実の長男。
- 松本さちこ 30代女性。誠一の婚約者。岡山出身。

SE 街の雑踏

誠一 「小さい頃、夢見た仕事につけてますか？」

小学校の卒業アルバムに、『将来になりたい職業は？』というページがありました。クラスメイトは野球選手、プロレスラー、宇宙飛行士、超能力者と書いたヤツもいました。僕はそれを見て、馬鹿だなあ、なれる訳ねえべ、子供だなあ、と心の中で馬鹿にしてみました、自分も子供のくせに。当時、あれになりたい！なんて考えたこともなかったし、そうゆう特別な人にはなれないだろうと始めから諦めてたんです。ビビりのカッコつけ。挑戦する前から失敗するのが恥ずかしかったんです。

そんな僕がアルバムに書いた職業は……、『サラリーマン』。
今の自分だったら 何て書くのかなあ……」

SE 波の音

ある太平洋沿岸の町。以前は漁業が盛んだったが、今は漁師は数えるほど。

港のそばに港と海が望める小高い山がある。それは昔、海の様子を見るために町の人によって作られた人工の山。六メートルほどの山の頂きには小さな祠と戦没者の慰霊碑、そして一本の桜の木がひっそりと茂っていた。

季節は東北の遅い春。柔らかな風に吹かれて時折桜の花びらが舞い落ちている。

SE カモメの鳴き声。

正午前のうららかな陽射しの中、望がリュックを背負い、電車のおもちゃで遊びながらやって来る。

続くなつよ、手には敷物を抱えている。遅れて兵吉もついてくる。

汽車 汽車 ポツポツポ シュッポシュッポシュッポポウ

僕らを のせて シュッポシュッポシュッポポウ

スピード スピード 窓のそと 畑も とぶとぶ 家も とぶ

走れ 走れ 走れ 鉄橋だ 鉄橋だ 楽しいな

なつよ 「上手だごだ。どこで覚えたのや？」

望 「ママが歌ってた」

なつよ 「明美が。歌うの好きだったがらな。でもね、昔は兵隊さんの歌だったんですよ」

望 「兵隊さんの？」

なつよ 「うん」

望 「汽車の歌だよ」

なつよ 「汽車の歌だけど、元は兵隊さんの歌だったの」

望 「どんな歌？」

敷物を広げながら歌うなつよ。それはいつしか山全体が色づいたように見える。

汽車汽車 ポップポップ シュツポシュツポシュツポシュツポウ

兵隊さんをのせて シュツポシュツポシュツポウ

僕等も手に手に日の丸の 旗を振り振り送りませう

万歳 万歳 万歳 兵隊さん兵隊さん 万々歳

兵吉も手伝っている。

望 「バンザイって何？」

なつよ 「ばんざいって言うのは、良かった良かったってこと」

望 「兵隊さん、よかったんだ」

なつよ 「そう思うしかなかったの」

兵吉 「今日誠一帰ってくんのが？」

なつよ 「んだよ」

兵吉 「そうが」

望、慰霊碑の前に立ち、

望 「これなに？」

なつよ 「戦争に行つて死んだ人を忘れないようにつて建てたの」

望 「お墓？」

なつよ 「みたいなもんです」

望 「戦争つてなに？」

なつよ 「・・・国と国のケンカ」

望 「ケンカしたらダメなんだよね？」

なつよ 「仲良くするのが一番いいの」

望 「じいちゃんは戦争したの？」

兵吉 「いや」

なつよ 「じいちゃんね、戦争には行かなくてこの町ば守つてだの」

望 「どうやって？」

なつよ 「この山でね、戦闘機が来るのを見はつてだの。夜なるとライトば煌々とたいでね、戦闘機はみつけるとサイレン鳴らすんだ。見はり隊の親分だったんだから」

望 「すごいね、じいちゃん！」

なつよ 「んだよ」

兵吉 「・・・」

正治 「ずいぶんきれいに咲いだごだあ」

自転車に乗つてやつて来る正治。

正治 「なに、なつよさん花見すんのすか？」

なつよ 「んだ、天気いいがらや」

正治 「兵吉さん、どうも」

兵吉 「仕事どうしたのや？」

正治 「今日非番」

兵吉 「うろろうろしてるだけなんだから毎日非番みてーなもんだべ」

正治 「パトロールだっちゃ」

兵吉 「いい仕事だな」

正治 「何かあった時の我々ですから」（子供に気付いて）「誰の子供？」

なつよ 「明実んとこの望」

正治 「大っきくなったごだあ」

なつよ 「こんにちはって」（望を促す）

望 「・・・こんにちは」

正治 「こんにちは。めんこいなあ、なんぼになったのや？」

望 「・・・六歳」

正治 「六歳！幼稚園さ行ってんのが？」

なつよ 「来年がら小学校だよね」（望を見ながら）

望 「・・・うん」

正治 「楽しみだっちゃね」

なつよ 「どごさ行くの？」

正治 「ばあちゃんの様子見にホームさ行くんだっちゃ」

なつよ 「照子ちゃん、元気にしてんの？」

正治 「元気元気。頭以外全部元気なんだ」

なつよ 「元気でいがあったっちゃ」

正治 「いいごとねーべっちゃ。手に余ってどうしようもねーんだ」

なつよ 「ほだごと言わねでちゃんとしてあげさいん、なんだかんだ言っても親なんだから」

正治 「俺ん時は、ピンピンコロリがいいなあ」

兵吉 「そう上手ぐはいかねーんだど」

正治 「大丈夫大丈夫」

なつよ 「橋のところに新造おんちゃん居っと思うがら、見だら花見やってっからって言っておいで」

正治 「了解！」

なつよ 「みんな集まっから正治さんも後で来たらしいっちゃ」

正治 「じゃ、後でおじやますっから。んでます」

SE ひばりのさえずり。

兵吉 「今日誠一帰ってくんのが？」

なつよ 「んだよ」

兵吉 「そうが」

教子、よしみ、茂が、風呂敷に包まれた重箱や飲み物、宴会に必要なものをバックに入れて運んでくる。

茂 「気持ちいいなや」

よしみ 「あら、満開だっちゃ、良かったごだ」

教子 「先週寒かったんですけど二、三日前からあったかくなってね、一気に咲いだんです」

よしみ 「いがったっちゃあお天気良くなって。ほんと花見日和だね」

教子 「よしみちゃんのお陰です」

よしみ 「私何してないちゃ」

教子 「よしみちゃん来っといつも晴れるから」

茂 「晴れ女だっが？」

教子 「日頃の行いが良いから、よしみちゃん」

よしみ 「持ち上げられても何も出ませんよ」

教子 「なんだ、出ないんだ」

茂 「姉さん、何期待すつたの？」

教子 「ご祝儀でも出てくるんでないかと思ってさ」

よしみ 「こつちがもらいたいくらいです」

望 「ばあば、お弁当持ってきた？」

教子 「持ってきましたよ」

望 「サーモン入ってる？」

教子 「いっぱい入れてきました」

望 「何個？」

教子 「心配しなくても食べきれないくらい持ってきた」

よしみ 「普段食わせらってねえのがや」

教子 「お母さんあんまり料理作らないんだよね。だからばあばのところに来たらいっぱい食べるんだもんね」

望 「うん」

教子、料理やお酒の準備をし始める

なつよ 「勝男はどうしたのや？」

教子 「誠一ば迎えに行きました」

なつよ 「何時頃着くの？」

教子 「もうすぐ着くんでない」

なつよ 「そうが。今正治さん通ったよ、これから照子ちゃんのとこ行くって」

教子 「花見だと言ってくれました？」

なつよ 「誘つといだ。後で寄るって」

教子 「そうですか、賑やかになりますね」

よしみ 「けど久しぶりだ、日和山で花見すんの」

茂 「いつぶり？」

よしみ 「んー、明実とか誠一がちっちえ時でねがったがや。父さんと母さんと私とでや」
なつよ 「んだ」

よしみ 「武志の足のギブス外しに行くがらって、教子さん武志ば連れで病院さ行ったべ」

教子 「あー」

よしみ 「あん時だっちゃ。明実と誠一ば連れてここでご飯食べたんだ。今日は武志は来れんの？」

教子 「朝から見えねえんだ」

よしみ 「仕事は？」

教子 「まだしてねーの。毎日パチンコばかりしてんだ」

茂 「パチンコでも何でも儲かってればね、たいしたもんだっちゃ」

教子 「なーに、貯金切り崩してんだ」

よしみ 「なんぼ持ってんのや」

教子 「分かる訳ねっちゃ、自分で管理してんだもの」

よしみ 「サラ金がら借りたりしてんでねのが？」

教子 「今のところ大丈夫だどは思うんだ」

よしみ 「注意して見てないど、家から何がらみな持ってがれんだどわ」

教子 「そんな時は武志ば殺して首でもくくります」

茂 「ずいぶん貯めでだんだな、武志」

よしみ 「あんだみたく、財布に入れたら入れた分だけ使って来る人とは違うんだ」

茂 「ここで言うことねーべっちゃ」

よしみ 「ここで言わねがったらどこで言うの」

茂 「何も家で言ったらいいべっちゃ」

よしみ 「家で言ったら寝だふりすっぺ」

なつよ 「よしみ、あんまり言うんすな」

よしみ 「だってや母さん、この人この歳になっても貯金もないんだよ」

茂 「あだりめだべや、あんだに全部渡してんだがら」

よしみ 「私が管理しなかったら今頃野宿だわ」

なつよ 「茂さんもちやんと働いでんだがら文句言わねーの」

よしみ 「だってや・・・」

教子 「ケンカはそれぐらいにしてそろそろ始めますか？」

よしみ 「みんなば待ってねくていいの？」

教子 「いいのいいのそのうち来っぺ。茂さんはビールでいいの？」

茂 「昼間っからいいのがや」

教子 「いいべっちゃ、お花見だもの」

よしみ 「遠慮するなんてめずらしいな」

茂 「父さんもどうですか？」

兵吉 「あー」

なつよ 「最近あんまり飲まないんだよわ」

よしみ 「一杯ぐらいならいいんでないの。ビールにしますか？酒にしますか？」

兵吉 「酒」

教子 「茂さんはビールでいい？」

茂 「はい。あ、どうも」

教子 「よしみちゃんは？」

よしみ 「私もちよっともらうがな」

教子 「はい、いっぱい飲んでください。次いつ飲めるかわからないんだから」

よしみ 「最近弱くなってね」

茂 「んだ、すぐ酔っ払うんだ」

なつよ 「あんまり飲むすなよ」

よしみ 「ほどほどにします」

茂 「うまそうだねー、これ何？」

教子 「きんぴらば豚バラで巻いたの。何も手かかってないですよ」

よしみ 「姉さんの料理はハイカラだからね。店でもやったらいいんでねーの」

教子 「バカ言わないでください。田舎料理なんだがら」

誠一とさちこが話しながらやって来る。

誠一 「この公園で遊んでたんだ、小さい頃」

さちこ 「そうなんだ」

茂 「おっ、誠一！」

なつよ 「おかえり」

教子 「御苦労さまです」

よしみ 「おかえり」

茂 「久しぶりだなや」

誠一 「茂さん・・・」

教子 「さちこさん疲れだんでないの？こんな田舎まで」

さちこ 「・・・大丈夫です」

よしみ 「ずいぶんきれいな人だごだ。さちこさんて言うの？」

教子 「そうなの。ほら、そんなとこに立ってないで、こっちさ来たらいっっちゃ」

茂 「んだんだ」

教子 「さあさあ」

よしみ 「お似合いだっちゃ」

茂 「姉さん、紹介してけさいん」

教子 「こちら松本さちこさん。今度誠一ど結婚するんだど」

よしみ 「誠一の叔母のよしみです。そしてこっちがあたしの連れ合いの茂です」

茂 「宜しくね」

さちこ 「・・・宜しく願います」

よしみ 「じいちゃんとはあちゃんは分かる？」

さちこ 「いえ」

よしみ 「誠一のじいちゃんとはあちゃんです」

さちこ 「初めまして、さちこです」

なつよ 「良く来たごだあ。じいちゃん誠一のお嫁さんだつてや」

兵吉 「そうが」

よしみ 「ばあちゃん、誠一ど会うの久しぶりだべ」

なつよ 「んだな」

教子 「誠一どうしてんだ？ちゃんとご飯食べでんのが？って毎日心配すつたんだど」

誠一 「もう子供でねーんだがら、心配しねくていいべ」

なつよ 「ほうが、元気ならそれでいいんだ」

教子 「おとさんは？」

誠一 「知らねーよ」

教子 「なんだや、誠一ば迎えに行ぐつて出でいったんだど。会わながつた？」

誠一 「会わねがつたよ」

教子 「おとさんどごさ行つたんだべ」

茂 「寄り道してんのがや」

よしみ 「ここまで何で来たの？」

誠一 「タクシー」

茂 「行き違いになつたんだべ。そのうち戻つてくつぺ」

よしみ 「んだんだ」

教子 「さあ、ここに座つて下さい」

望、なつよの陰から二人を見ている。

誠一 「望！」

さちこ 「あの子は？」

誠一 「甥っ子。姉ちゃんの子供で望っていうんだ」

さちこ 「望君、こんにちは」

望 「・・・」

教子 「何恥ずかしかってんの」

なつよ 「こんにちはって」（望をうながす）

望、隠れてしまう。

なつよ 「人見知りで困ってんだ」

教子 「初めての人だと時間かがんの」

さちこ 「そうなんですか」

教子 「お姉ちゃんに会った？」

誠一 「まだ」

教子 「なんだかんだってうるさいんだ」

誠一 「よしみちゃんは元気にすったの？」

よしみ 「もう体ボロボロだ」

茂 「股関節手術したんだ、この前」

誠一 「大丈夫なの？」

よしみ 「大丈夫だっちゃ。ただあんまり長い時間歩けなくなっただけだな」

教子、嬉々として誠一、さちこの世話をする。

誠一 「花見すったの？」

教子 「んだ。せっかくだからね」

誠一 「せっかく・・・」

教子 「さちこさん、この公園に来るの初めてだよね？」

さちこ 「はい」

なつよ 「東京の人？」

さちこ 「いえ、岡山です」

なつよ 「あー、岡山の人」

よしみ 「母さん、どこにあるか分かる？」

なつよ 「わがんね」

よしみ 「わがんねがったら聞いたらいいべっちゃ」

さちこ 「瀬戸内海に面したところですよ」

なつよ 「ずいぶん遠いどっから来たんだね」

誠一 「今は東京に住んでんだ」

茂 「だったら新幹線ですぐだな」

さちこ 「はい。今日も新幹線で来ました」

よしみ 「もう一緒に暮らしてんの？」

誠一 「うん」

よしみ 「どこに住んでんの？」

誠一 「世田谷」

茂 「金持ってたんだな」

誠一 「なーに、世田谷だからって金持ちとは限らないんだよ。ピンからキリまであるんだが
ら」

茂 「有名人だから田園調布に家でも建てたんでねえのが」

誠一 「冗談は休み休み言って下さいよ」

教子 「何が有名なの。誰も知らねーべっちゃ。さ、疲れだべがらさちこさんも一杯どうぞ。ビ
ールでいい？」

さちこ 「はい。昼間からいいんですかね」

教子 「いいのいいの、お花見だから」

さちこ 誠一にビールを注ぐ教子。

さちこ 「ありがとうございます」

茂 「じゃ、乾杯すつぺ」

よしみ 「あんだは飲み会になると元気出んだな」

茂 「きっかけがねーどさちこさんも飲みづらいべ」

教子 「遠慮しないで飲んでね」

さちこ 「はい」

茂 「お兄さんは未だ来ずですが、乾杯すつぺ。では、誠一のお嫁さんに、乾杯！」

全員 「乾杯！」

よしみ 「さちこさん、この辺見て歩いた？」

さちこ 「前一度来たんですけど、夜来たんであまり覚えてないんですよ」

教子 「今回ゆっくり見て行ったらどうですか」

よしみ 「何にもないどころですけどね」

茂 「なんだや、海もあるし港もあるし、朝市は有名だべっちゃ」

さちこ 「そうなんですか、彼はあんまり話さないんで、ね」

誠一 「だって、これと言って見るとこもねーしな」

よしみ 「なんだや、ちゃんと教えてあげさいん。赤貝はね日本一採れんだよ」

誠一 「採れるつたつて、食ったことねーよあんまり」

兵吉 「みな東京さ持っていくがら地元の間人は食わんねんだ」

なつよ 「じいちゃんが船に乗ってた頃はたくさん採れだんだど」

兵吉 「昔はカレイだ、キチジだつていっぺい獲れだんだ」

さちこ 「キチジってなんですか？」

教子 「キンキのこと」

さちこ 「ああ」

教子 「今は高級魚だけど昔は捨てるぐらい獲れだんだって」

なつよ 「かまぼこの材料だったんだよ」

さちこ 「今じゃ考えられないですね」

誠一 「うちでもかまぼこ作ってたんだべ？」

なつよ 「んだよ。家の裏に機械あったの覚えでっか？」

誠一 「工場みだいなのあったのは覚えでっけど、もう動いでねがったな」

なつよ 「昔は住み込みで働いでる人もいてね、賑やかだったんだよ」

さちこ 「大きなお家だったんですね」

なつよ 「そうでもないよ」

教子 「さちこさんたくさん飲んでね」

茂 「結構飲むの？」

誠一 「俺より飲むんだ」

茂 「そいづはいいなあ」

さちこ 「そんな飲めませんから」

教子 「はい、どうぞ」

紙皿と箸などを渡す教子。

さちこ 「ありがとうございます」

教子 「遠慮しないで何でも食べて下さい、田舎料理ですけど」

さちこ 「どれも美味しそうで、迷っちゃいます」

教子 「これタラの芽のてんぷら、今朝採って来たの」

さちこ 「美味しそう！いただきます」

教子 「父さんもどうぞ」

兵吉 「んー」

さちこ 「美味しいです！」

教子 「今が時期だから」

なつよ 「望は何食べる？」

望 「サーモン！」

教子 「分かりました」

サーモンの刺身がいっぱいのおいている皿とフォークを渡す教子。

さちこ 「わー、サーモンばかり！いっぱい食べるんですね」

教子 「サーモンしか食べないの」

誠一 「望、何でも食わねど大きくならんねんだど」

望 「やだー」

教子 「あら、どこさいったんだべ・・・」

誠一 「何探してんの？」

教子 「しょう油。忘れてきたみたい」

よしみ 「台所のテーブルの上にあったの見たよ」

教子 「ちよっと取ってくつから。望くん待ってて下さい」

誠一 「俺が取ってくつか？」

教子 「いいの、すぐだから。あんだはお客さんだから座っててけさいん」

と、言いながら嬉しそうに去る教子。

茂 「姉さんはりきってたんだ、誠一お嫁さん連れで帰ってきて」

誠一 「・・・」

よしみ 「最近どうなの、変わらないの？」

誠一 「んー、変わらないよ」

よしみ 「麻薬とかやってねーべな」

誠一 「やるわけねーべ！」

よしみ 「なんだがテレビ見でつとや、芸能人どんどん麻薬で捕まってつからや」

誠一 「金持ってる芸能人と一緒にすんな。食うのもやつとなのに、麻薬買う金なんてどこさあんの」

よしみ 「だったらいいげどや。おとさんもおかさんも口には出さないけど心配してんだがらね」

誠一 「大丈夫です。な」(と、さちこに)

さちこ 「はい。前はどうかかわらないですけど、今はしっかりしてるみたいですよ」

誠一 「みたいってなんだよ。しっかりやってます」

よしみ 「だったらいいけどや」

茂 「最近はなんか出でんのが？」

誠一 「んー、ぼちぼちね」

さちこ 「今度映画に出るんでしょ。ちゃんと言わなきゃ」

誠一 「チョイ役だよ」

茂 「チョイ役でも何でも映画俳優には変わりねーべちゃ」

よしみ 「何にも教えねんだ。チョイ役でも出れば見るのにな」

誠一 「言ったら言ったで、なんだこれしか出ねのがって言うべ」

よしみ 「そんなごとねーべっちゃ」

茂 「みんな楽しみにしてんだがら」

よしみ 「ばあちゃんの部屋見でみる、あんだの写真ばっかり飾ってあつから」

なつよ 「あんだのお母さんがいろいろ集めてくんだ」

茂 「四人の孫の中で誠一が一番かわいいんだおんね」

なつよ 「孫は孫。みんな同じ」

よしみ 「姉さん働きに出てたから、誠一の面倒はばあちゃんが見でだの」

さちこ 「そうなんですか」

よしみ 「ちゃんと食えでんの？」

誠一 「バイトしてっからね、なんとか」

よしみ 「バイトって何してんの？」

誠一 「居酒屋」

よしみ 「飲み屋って大変だべ？」

誠一 「大変じゃない仕事なんてねーべ」

よしみ 「んだげつとや、体に気つけさいよ」

誠一 「わがってます」

茂 「誠一たちのこと自分の息子より心配してんだ」

よしみ 「あたりめだべつちや、結婚するまで一緒に住んでたんだよ。小さい頃は映画に連れていったり遊園地に連れて行ったりしてだんだがら」

誠一 「ダイエーの上でご飯食べでね」

よしみ 「あつという間に大っきくなつてな」

誠一 「・・・」

茂 「さちこさんは、仕事何やってんのすか？」

さちこ 「婦人服を作る会社にいます」

茂 「おしゃれだもんね」

さちこ 「いえ、これユニクロですよ」

よしみ 「ユニクロでも着る人が違えばお洒落に見えるおんな」

茂 「デザイナーなの？」

さちこ 「いえ、広報やったり、経理やったり、小さい会社なんで何でもやらされるんです。ね」

誠一 「ん、毎日遅くまで仕事してんだ」

茂 「遅くって何時ごろまで働いてるの？」

さちこ 「九時過ぎる時もあります」

よしみ 「そんなに働いて体壊すんでねーの」

さちこ 「切の良いところまでやらないと気が済まない性格なんです」

よしみ 「ほどほどにしないでね、病気になってからでは遅いんだよ」

さちこ 「はい」

誠一 「看護婦だったんだ、よしみおばちゃん」

茂 「大丈夫だべ、まだまだ若いんだがら」

よしみ 「あんだ、歳わがって言うてんの」

茂 「見ればわがっぺっちゃ。三十ぐらいだべ」

さちこ 「三十四です」

茂 「ほーら」

よしみ 「女性は三十代にいろいろ出るんだがら気をつけてね」

さちこ 「はい」

なつよ 「誠一はなんぼになったのや」

誠一 「三十九」

よしみ 「三十九！おんつあんだべっちゃあ。早く子供作んねどな」

誠一 「んー」

よしみ 「歳なんてあつという間にとんだど。早く作らいん」

誠一 「わかりました」

よしみ 「ね、さちこさん」

さちこ 「ええ」

よしみ 「じいちゃんもばあちゃんも早くひ孫の顔見だいべがら」

なつよ 「あんまり言うんすな。ね」

さちこ 「・・・はい」

茂 「さちこさん、俺もな岡山で働いたことあるんだよ」

さちこ 「そうなんですか」

よしみ 「まーだ、いいかげんなことばり言って」

茂 「なんだや、ホントだべっちゃや。水島工業地帯ってあるでしょ、あそこの港湾工事で三か月くらい居たんだよ」

さちこ 「あつ、近くです実家。うち、水島の隣の児島っていうところなんですよ、瀬戸大橋の根もとの」

茂 「いいところだったよ。干したタコが有名だったよね？」

さちこ 「よく知ってますね！」

茂 「飲みさ行った店のママさんがや、タコ飯作ってくれたんだけどビックリするぐらい旨がったんだ」

よしみ 「なんでお土産買ってこないの」

茂 「あーゆうのは現地で出来たて食べないどダメなんだ」

よしみ 「だったら連れて行ってくれだらいいさ」

茂 「今度な」

よしみ 「あんだの今度はあてにならないべっちゃ」

さちこ 「実家から送ってもらいましようか？」

よしみ 「気にしなくていいの、この人が悪いんだから」

茂 「せっかく岡山の話題で盛り上がってんのに邪魔することねーべ」

よしみ 「盛り上がってんのはあんただけでしょ」

新造 「おー」

釣り道具を持った新造がやって来る。

茂 「新造さん」

兵吉 「釣りすったのが」

新造 「あー、新しい仕掛け試してんだ。なに、花見すったの？」

兵吉 「んだ」

なつよ 「寒かったでしょ、ご飯食べて行って」

新造 「んー」

兵吉 「正治と会ったが？」

新造 「あー。いつ会ってもさわがしいな」

よしみ 「おんちゃん久しぶりです」

新造 「よしみが、足治ったのが？」

よしみ 「お蔭さまで良くなりました。さ、体冷えだべがら酒でもどうですか」

新造 「んー」

なつよ 「こつちさどうぞ」

出迎える誠一。

誠一 「おんちゃんご無沙汰してます」

新造 「誠一が？」

誠一 「はい」

新造 「会うの何年振りだべ」

誠一 「んー、十五年振りぐらいですかね」

新造 「元気にすったのが？」

誠一 「まあ。おんちゃんは？」

新造 「まあまあだ」

茂 「まあ、飲んでください」

新造 「おっ」

よしみ 「おんちゃん、こちらさちこさん。誠一ど結婚するんだど」

さちこ 「初めまして。宜しく願います」

新造 「どうも。やっと結婚すんだな」

誠一 「うん」

さちこ 「十五年振りって、ずいぶん会ってなかったんだね」

誠一 「まあ、いろいろあってな」

よしみ 「こっちはなんにもないっちゃ。私たちの顔見だくなかったんだべ」

誠一 「違うよ」

新造 「正月もお盆も帰って来ねーがらな」

誠一 「新幹線混むがら、ずらして帰ってだんです」

茂 「どうぞ」

茂、料理を新造に渡す。

茂 「何処で釣ってだんですか？」

新造 「橋んところ」

茂 「ボラすか？」

新造 「んだ」

よしみ 「釣った魚はどうすんの？」

新造 「そのまま逃がすんだ」

なつよ 「食うより釣るのが好きなんだおんね」

そこへ教子と勝男が手に追加の酒などを持ってやって来る。

教子 「お待たせしました」

茂 「あら、兄さんどこさ居だの？みんな待ってだんだよ」

勝男 「なんだが信号のところで渋滞しててや、全く動がねぐなつたんだ。だから脇道抜けて戻ってきたんだわ」

よしみ 「大変だったねや」

勝男 「さちこさんごめんね、迎えに行けなくて」

さちこ 「大丈夫です。タクシーですぐでしたから」

勝男 「そうが。おじさん、どうも」

新造 「おー」

勝男 「釣りすつたんですか？」

新造 「んだ」

勝男 「朝、まだ寒いでしょ」

新造 「なんでもねっちやこのくらい」

茂 「お先にやってみました」

勝男 「もう酔っ払ってんでねーのが」

茂 「大丈夫大丈夫。ちびちびやりますから」

勝男 「ホントがあ。みんなご苦労さん。さちこさんもよく来たね」

さちこ 「ご無沙汰してます」

勝男 「二人とも元気そうでなによりだ」

よしみ 「はい兄さん、ビール」

教子 「この人家の前で待ってだんだよ、誠一達の事」

勝男 「あたりめだっちゃ、家わがんねがったら困っぺ」

教子 「わがんね訳ねーべっちゃ、自分の家だもの」

勝男 「ずいぶん変わったがらや」

茂 「兄さん、みんな揃ったんで改めて乾杯したらいいっちゃ」

よしみ 「んだんだ」

勝男 「えー久しぶりにみんな揃ったし、誠一もお嫁さん連れで来たし、天気も良くて、あったかくなって良かった。今日は楽しく花見をしましょう。乾杯！」

全員 「乾杯！」

誠一 「武志も来ればいいのにな」

教子 「パチンコにでも行ってんだべ」

誠一 「なんで仕事しねーのや？」

教子 「分かりません」

勝男 「何考えでんだが」

教子 「あんだから言ってけさいん」

新造 「なんで働がねーの？」

勝男 「本人は何も言わねんだげつとも、なんだか会社の人と上手くいがねがったみたいですよ」

教子 「あんだらみたいに酒飲まないから友達も少なかったみたいですよ」

茂 「鳶だったらいつでも口きくよ」

よしみ 「余計なごとうんすな」

教子 「お願いします、無理矢理連れでって働かせてください」

勝男 「武志にしっかりしてもらわねーどな。あんだは帰って来ねんだべがら」

誠一 「・・・」

新造 「いつ結婚すんの？」

誠一 「秋にって考えているんです」

よしみ 「どこですんの？」

誠一 「式はたぶん岡山。さちこの母親がさ、調子悪いんだ」

よしみ 「調子悪いって、病気なの？」

さちこ 「ええ、すい臓に癌がみつかったんです」

よしみ 「そう。大変だなあ。しっかり支えてあげさいよ誠一」

誠一 「うん」

新造 「こつちでは何もやんねーのが？」

勝男 「お披露目会くらいはやらないとね」

誠一 「お知らせするだけでいいんでねーの」

よしみ 「やつといだ方がいんだ。うるさいのがいっぺーいっから」

なつよ 「ちゃんとしといだ方が、後がいろいろ言われなくていいんだよ」

誠一 「わがった」

よしみ 「うるさいと思わないでね、田舎だからいろいろ言う人がいるがらさ」

さちこ 「大丈夫です、うちも田舎ですから。それにご親戚の皆さんに会えるのも楽しみです」

教子 「我慢してね」

勝男 「我慢でねーべや。みんなと顔つなぎになるっていいごどなんだよ、変なこと言わなくていいべっちゃ」

教子 「嫁に行く方は大変なんです。ね、よしみちゃん」

よしみ 「んだな。知らねー土地さ行って、知らねー人だちと生活すんだがら」

茂 「あんだも大変だったの？」

よしみ 「あたりめだべっちゃ。知らねのはあんただけ、男どもは何もわがんねんだがら。な、母さん」

なつよ 「それがあたり前なの」

勝男 「なんだや男だっているいろ大変なんだよ」

よしみ 「兄さんは大事にしてもらってだがらいいっちゃ、家督だもの。父さんも母さんも兄さんには甘かったおんな」

勝男 「そだなごどねーべっちゃ」

よしみ 「何がねーの、あの家だって父さんに建てでもらったんだべ」

勝男 「馬鹿言うんでねーよ。俺だって半分出したんだがら」

よしみ 「私は未だに借家住まいなんだがらね」

茂 「そだごど言うな。いつでも建てでやつから」

教子 「茂さんもそう言ってんだがら、すぐにでも建てでもらったらいいっちゃ」

よしみ 「人の家ばり建てで、自分の家は後回しになってんだ」

茂 「人の家ば建てるのは仕事だべや」

教子 「いっぱい貯めでんだべがら、さぞかし立派な家ば建てんだべ」

誠一 「おんちゃん大変だね」

茂 「まいったなや」

新造 「家族がいるから家も必要なんだ。一人だど何にもいらねんだわ」

よしみ 「じゃあおんちゃんの家、私がもらうがな」

教子 「んだ、おんちゃんいらなんだつたらよしみちゃんにあげて下さい」

勝男 「そいなごどしたら叔母さんたちが黙ってねーべさ」

なつよ 「そいなごと言わないの」

誠一 「じいちゃん兄弟多いんだ。何人いんだっけ？」

勝男 「じいちゃんだべ、勝次郎おんちゃん、新造おんちゃん、塩釜のおじさんだべ、女が下馬

のお婆さん、武子お婆さん、みよこお婆さん、小田原のお婆さん、繁子お婆さん。男四人に女五人」

教子 「みんな長生きなの」

よしみ 「金、金、金ってうるさいの」

なつよ 「よしみ！」

よしみ 「なーに、母さんも随分いじめらつたんだべ」

なつよ 「いじめでないの。昔は女の子には遺産とか分けねがったの。だからお金にうるさいの」

よしみ 「昔でねくて良かったわ、私」

教子 「遺言状書いでおかないと、後の人苦労すんだ。どうやって分げんだ？あの金どこさいつ

「たんだ？つて。さあ、さちこさん、お稲荷食べて」

さちこ 「はい、いただきます」

勝男 「おかさんの稲荷は特別なんだ」

誠一 「これが普通だと思ってだらや。東京さはねーがらびっくりしたんだ」

教子 「そうでしょ。青森のお稲荷だから」

さちこ 「紅シヨウガが入ってる！」

誠一 「食った事ねーべ。ウチでお稲荷って言えばこれなんだ」

教子 「酔飯じゃなくてご飯に紅シヨウガを混ぜるの。いっぱい食べてけさいん」

さちこ 「お母さん青森なんですか？」

教子 「青森の弘前」

さちこ 「へー。青森と宮城でどうやってお父さんと知り合ったんですか？」

教子 「騙されて連れてこられたの」

望 「だまされたの？」

勝男 「人聞きの悪いこと言うんすな」

教子 「おとうさん紳士服の営業で青森に来ったの。そんな時につかまったんです」

さちこ 「お父さんやりますね」

教子 「遊び人だったの」

勝男 「バカ言うんすな。信用したらどうすんの」

教子 「なーに、嘘じゃないでしょう」

勝男 「もう少し言い方ってものがあっぺさ」

教子 「本当の事言って何困んの」

勝男 「だまして連れてきたんでねーべっちゃ、あんだもいいと思って付いで来たんでしょ？」

教子 「あん時分かってたら付いて来ませんでした」

茂 「まあまあ、花見の席だから楽しく飲みましょ」

よしみ 「言いたい事は言えるうちに言っといだ方がいいんだ」

なつよ 「あんだがしっかりすねがらだど、勝男」

勝男 「・・・」

さちこ 「お父さんは漁師にはならなかったんですか？」

教子 「漁師になるのが嫌で家出したんだよね、母さん」

なつよ 「そいなごともあったな」

勝男 「その話はもう少し飲んでがらにしていけねがな」

教子 「なにも恥ずかしいことないでしょう。この人ね、歌手にならないかって誘われだんだつて」

勝男 「やめろって！」

さちこ 「本当ですか？」

教子 「のど自慢で合格した時に声かけらったんだって」

よしみ 「兄さん、歌だけは上手いおんな」

さちこ 「凄いいじゃないですか！」

教子 「本当かどうか誰も分かんないの」

勝男 「なんだやホントの話だべっちゃ！」

正治 「おー！盛り上がってるね！」
なつよ 「早がったごだー。照子ちゃん大丈夫なの？」
正治 「ばあさん寝ったがらや、顔見て帰ってきたんだわ」
勝男 「早く飲みでがったんでねーのが」
正治 「なーに、勝男さん寂しいと思って早く来たのに」
教子 「何が寂しいの、いつも会ってんのに」
正治 「まいったなあ。あや、誠一くん、帰って来たの？」
誠一 「どうも」
正治 「久しぶりだなや。こないだ観だよ2時間ドラマ。死体だったな」
茂 「有名人だな、誠一」
教子 「どこが有名人なの、瞬きしたらいねぐなってんだわ」
誠一 「すみませんねー」
正治 「勝男さん！今小畑さん家の前通ったんだけどや、今がら建前だつて」
勝男 「あつ、忘れた！」
教子 「あんだ顔出さないとまずいんでねーのお世話になってんだがら」
勝男 「んだな、ちよつと行ってくつかな」
教子 「望も連れで行ったらいいっちゃ、見だごどねーべがら。なあ、望」
望 「何を見に行くの？」
教子 「建前つて言つてね、お家の上から餅をまくの」

なつよ 「いっぱい拾ってがいん」

望 「うん」

よしみ 「せっかくだからみんなで行って来たらいいっちゃ」

教子 「よしみちゃんは？」

よしみ 「行がねっっちゃ、脚こいなんだがら」

教子 「んだね。早ぐ行かないと始まってがらだど拾えないよ」

正治 「んだ」

勝男 「誠一たちも行くが？」

誠一 「うん」

勝男 「じゃみんなで行くべ。父さん達はどうする？」

兵吉 「ここで待ってつから」

茂 「じゃ、俺も残つかな」

よしみ 「あんだも行ってきなさい。教子さんも行ったらいいいっちゃ、母さん達は私が見でつから」

教子 「そうお、じゃあいっぱい拾ってくつからお願いしますね」

勝男 「望、いっぱい拾うにはな、上でなくて下ば見つといいんだど」

望 「下？」

勝男 「みんな上ばり見でつから足元に意外ど落ちでんだ。人の逆をすんのがいいんだ」

教子 「変なごと教えんすなよ」

正治、勝男、誠一、さちこ、茂、教子に連れられた望、去る
見送るよしみ。

よしみ 「あー落ち着いだ。父さん飲んでる？」

兵吉 「んー」

よしみ 「おんちゃんも飲んでね」

なつよ 「いっぱい食べてけさい」

よしみ 「焼きカレイもあつから」

新造 「んー」

SE ひばりのさえずり

風に吹かれて静かに落ちてくる桜の花びら。

新造 「みんな集まっつといいなあ」

なつよ 「んだね」

よしみ 「葬式か結婚式でもねーど集まんねぐなったからね。前は正月お盆はおらいに寄って宴会
すったのにな、二十人も三十人も集まって」

兵吉 「・・・」

よしみ 「父さん死んでからだんだんやんねぐなったんだよ」

なつよ「・・・」

新造「兄弟も皆ずんちゃんばんちゃんになったがらな」

よしみ「違うつちゃ、まとめる人がいねぐなったんだっちゃ」

なつよ「勝男もいろいろ気遣ってやってたんだけどもな」

よしみ「いろいろ言う人がいでやりづらくなっただべ」

兵吉「・・・」

新造「ここもずいぶん変わったなあ」

兵吉「んだな」

新造「造船所の木端置き場で焼き芋したの覚えてつか？」

兵吉「いつ？」

新造「俺が六年生の頃でねーがや」

兵吉「あー、あの話が？」

よしみ「なんの話」

新造「俺と兄貴と勝次郎でや、焼き芋ばしたんだ学校の帰り。兄貴が畑から芋掘って来てや、

俺ど勝次郎は場所ば探したんだ、火使うがら木がたくさんあつとこねーがやって。そんで造船所の木端置き場さ行ったのよ、な」

兵吉「んだったがなあ」

新造「で、運ぶの面倒くせーがらここでやっぺってことになってや、木ば燃やし始めだんだ。

焼き芋は何度もやってだから上手くいったんだげどや、まずがったのはその後さ」

よしみ 「何したの？」

新造 「芋食った後、安心したのがや。ちゃんと消したつもりだったんだげど消えてながったんだな、火」

兵吉 「おき火になってだんだな」

新造 「その後、この公園で遊んでだらなんだが造船所の方が煙が上がってんだ、真っ黒いやつ。焦ったねや。火事になった！俺たちのせいだつて！ そしたら兄貴が、消しき行くぞつて 走りだしたんだ。今考えたら大変なことなんだげどや、走ってるうちに可笑しくて可笑しくてや笑い止まんねんだ、俺と勝次郎。兄貴だけ焦つてでや、それがまた可笑しくてや。なんなんだべな、あれ」

兵吉 「・・・」

よしみ 「そしてどうなったの？」

新造 「火自体はあんまり出てねがったがらや、船ば引き入れるところから水汲んで来て3人で消したんだ。あれはまずかったよな」

兵吉 「・・・」

よしみ 「父さんも悪ガキだったんだね」

新造 「俺は学校さ行がせてもらつて好きなことさせてもらつたけど、兄貴はどう思つてんのやっ」

兵吉 「・・・何も」

新造 「何かやりでーことながったのが？」

兵吉 「長男だがらな、跡継ぐのあたりめーだべ。でも、この腕がまともだったら、もう少し漁師やりでがったな」

新造 「・・・」

兵吉 「だげっと、この腕のお陰で兵隊に取らんねがった。おめと勝次郎は大変だったべ」

新造 「俺はモーターの開発すったがらいがったけどや、勝次郎はシベリアまで行ったがらな、酷がったおんな」

兵吉 「人変わって帰ってきたおんな」

なつよ 「あいな人でねがったのにね」

よしみ 「おっかねがったおん勝次郎おんちゃん。ご飯の好き嫌い言うどや、ワーってすごい勢いでごっしやがれだんだ」

なつよ 「死ぬより酷い苦労したんだべ。可哀想にな」

釣り竿の手入れを始める新造。風に吹かれた桜の花びらがハラハラと舞い落ちる。

新造 「いつの間に歳とったんべなあ」

なつよ 「んだ。気付いたらあちゃんになってだわ、気持ちは二十歳の頃のままなのにや」

なつよ 「十八でこの町さ嫁いできて、勝男が産まれて、よしみも産まれて、戦争が始まって、どうなるがと思った」

兵吉 「・・・」

なつよ 「あだし魚に触るのやんだくてね」

よしみ 「お嬢様だったおんね母さん」

なつよ 「だからこの人、嫁の教子に魚のさばき方教えたんだ一生懸命」

よしみ 「だから姉さん料理上手くなったんだな」

なつよ 「家のことでは、ホント新造さんに助けでもらった」

新造 「なにも」

なつよ 「かまぼこ焼く機械作ったの新造さんなんだよ」

よしみ 「そうだったね。でも、うるさい小姑たちがいで苦労したおんな母さん」

なつよ 「義姉さん達も、いねがったらいいねがったで寂しいんだど」

よしみ 「おがしなもんだな」

新造 「独りでご飯食っても美味くねーんだ」

なつよ 「そいな時はうちさ来たらいいつちや、新造さんの家でもあるんだがら」

兵吉 「んだ」

新造 「・・・」

SE 波の音

兵吉 「いい風だ。潮の匂いがするな」

なつよ 「んだね。こうやってゆっくり海見んのも久しぶりだ」

兵吉 「この港も、船と漁師と女子供でいっぺーだったなあ」

なつよ 「船が戻ってくつとみんな集まってね」

新造 「景気良がったおんな」

なつよ 「お祭りになつと盛り上がってね」

よしみ 「神輿担ぐ人、幟持った人、唄歌う人。その後を私ら子供がついでってね」

新造 「あん時は良がったな」

よしみ 「しかしなんでこいなぐなつたんだや」

なつよ 「なんにもねぐなつたわ、家もお墓も」

兵吉 「海に助けられるこどもあれば、命をもっていがれることもある」

新造 「自然を相手にしてんだがら、しょうがねーんだなあ」

よしみ 「んだげつとや、急だったがらさ」

なつよ 「でもこうやってまた会えたんだから」

兵吉立ち上がり、静かに歌いだす。

今朝の日和は空晴れわたり (チヨイチヨイ) 波静かエー

あれはエーとこーりや まだ也大漁だエー

船出せ出せと乗り子も揃い (チヨイチヨイ) 出て行くエー

あれはエーとこうーりや まだ也大漁だエー

(はーえんやさ えんやさ)

戻ってくる一同。

注・その土地の民謡でよい

正治 「さちこさんどうでした？」

さちこ 「岡山と一緒にでした。たくさん拾っちゃいました」

教子 「あんだ何個拾ったの？」

勝男 「ほれ」(手に持った餅を見せる)

教子 「一個しか拾わなかったの！？ 何しに行ったの！」

勝男 「俺まで一生懸命拾ってたら、なんだや勝男さんのとこ皆で来て食うもんもねーのがやつて言われっへ。」

教子 「誰もそんなこと考えでません」

勝男 「この町の人ほどごで何言ってるがわがねんだがらな」

教子 「馬鹿でねーの。誰もあんだのことなんか見てないがら大丈夫です」

正治 「餅拾いでケンカしなくてもいいべっちゃ」

教子 「さちこさん、この人ねスーパでパン一個だけって買えないの。食べないのに5個も6個も買ってくんのだ」

さちこ 「どうしてですか？」

教子 「一個しか買わないの恥ずかしいんだど」

勝男 「馬鹿ばっかり言ってるんでねーど」

教子 「誰に見栄張ってるんだが」

茂 「男にはいろいろあるんですよね、兄さん」

よしみ 「ご苦労様。さちこさん拾った？」

さちこ 「いっぱい拾いました、ね、望くん」

望 「うん」

望、袋に入っている餅を見せる。

よしみ 「いがったなや」

なつよ 「どうだったの？」

正治 「景気いいんだなや小畑さん。餅だお金だっていっぱい撒いでだんだっけ」

教子 「正治さんも座って食べてけさいん」

正治 「今日は何作ったのすか？教子さんの料理は料亭で食うより旨いから」

勝男 「調子のいいごどばり言って」

教子 「何も手かけでないがら、いっぱい食べで」

よしみ 「さあ、どうぞ」（と酌をする）「誠一は？」

さちこ 「トイレに行ってます」

正治 「ではいただきます」

勝男 「遠慮すんなよ」

教子 「はい、天ぷら。タラの芽と菜の花とタケノコあつから。茂さんもどうですか？」

茂 「もうがな」

教子 「どんどんやってね」

正治 「さちこさんも女優さんなの？」

さちこ 「とんでもないです。普通の仕事してます」

正治 「あんまり綺麗だからや、女優さんが思ったっちゃ」

さちこ 「やめてください。そんなじゃありませんから」

正治 「じゃ、誠一君とどうやって知り合ったの？」

さちこ 「高校時代演劇部にいたんですけど」

正治 「やっぱり女優さんだったんだ」

さちこ 「いえ、高校の時だけです。その時大好きな女優さんがいたんですね、いろんなご縁で今その女優さんの衣装協力をしているんですけど、その女優さんが誠一さんを紹介してくれました」

教子 「失敗したんでない？」

さちこ 「その女優さんにも言われました、お金は無いよって」

教子 「パツとしねんだから早く諦めて次考えたらいいのにな」

勝男 「頑張ってたんだがら気持ちよく応援してやったらいいべっちゃあんだも」

教子 「だってや・・・やり直すんだったら早い方がいいべ」

正治 「まだ四十なんだからこれからだっちゃ」

教子 「もう四十だよ」

茂 「歳とってがら売れる俳優さんだっているおんな」

勝男 「好きなこと出来るなら、やるのが一番なんだ」

教子 「夢ばかり追っかけても、ご飯食べらんげれば苦労すんのはさちこさんなんだよ」

勝男 「まだわがんねべっちゃ」

よしみ 「さちこさんはどう考えでんの？」

さちこ 「・・・頑張って欲しいです、俳優で。けど、駄目なら駄目でなんとかなりますよ」

よしみ 「んだ。さちこさんがその気なら大丈夫だ」

望 「ばあちゃん、シャボン玉やろう」

なつよ 「んだな、誠一おんちゃん戻ってきたら一緒にやっぺな」

望 「うん」

教子 「大変でしょ、誠一とやって行くの」

さちこ 「いえ、やさしいですよ」

教子 「気難しいし、すぐへそ曲げるでしょ」

さちこ 「たまに・・・」

教子 「昔っからなんです。気に食わないことあるとすぐへそ曲げてご飯食べないんですよ、自分の部屋に籠もって」

さちこ 「そうだったんですか？」

教子 「もうめんどくさいの。お祭りの時に子供神輿担ぐはずだったのに、朝になったら嫌だつて言つて部屋に籠もつてね。それからしばらく話もしないんだよ。何考えでんだが」

勝男 「何かあつたんだべ」

教子 「何もねーべっちゃ」

よしみ 「内弁慶などこあつからな、うまく操縦してね」

さちこ 「はい」

なつよ 「気持ちはやさしいがら我慢してけさいん」

さちこ 「はい」

正治 「いがつたね勝男さん、いいお嫁さんで。兵吉さんも安心だっちゃね」

兵吉 「んー」

教子 「後は当の本人にしっかりしてもらわねーどね」

茂 「誠一だつて頑張っぺや、なあ」

よしみ 「ほだな」

誠一、トイレから戻ってくる。

望 「おんちゃんシャボン玉！」

なつよ 「シャボン玉やろーつて望が」

誠一 「やるがー望」

望とシャボン玉を始める誠一。それを嬉しそうに見るなつよ。

教子 「誠一ね、小さい頃ばあちゃんと寝てたの」

さちこ 「そうなんですか」

教子 「毎日おやつにリンゴだ梨だって剥いでもらってたね。誠一も望と一緒に、人見知りでね、幼稚園に入るまで近所の子供とあんまり遊ばなかったの。だから字を教えたのもばあちゃん、自転車の乗り方教えたのもばあちゃんなの」

一同、遊ぶ三人を見ている。

教子 「あんな風にこの公園で遊ばせでんだよ」

勝男 「よく見てもらったんだ」

教子 「あんだが遊んでばかりいたがらでしょ。日曜はソフトボール、夜は飲みさ歩いで。ね、正治さん」

正治 「まいったなや」

勝男 「飲みさ行くのも仕事なんだよあんだ」

教子 「何が仕事なの。スナックさ行ってカラオケばかり歌ってたんだ、正治さんと一緒に」

勝男 「馬鹿言わないでくださいよ。友達が悩んでたら話を聞いてあげなきゃダメでしょ？気持ちちがふさいでたら歌を歌って気持ちを晴らすのがいいでしょ？何か間違ってますか？」

教子 「それがたまにならいいさ。なんで毎日行く必要があるの？正治さんそんなに悩みがあったのが？」

正治 「!？」

勝男 「正治だけでねーべっちゃ。会社の人間もいれば町内の人もいるでしょ。そういうところで話をしてっと困った時助けてもらえるじゃない」

教子 「誰が助けるの、酔っ払って何話したかも覚えでないのに」

勝男 「ちゃんと覚えでっちゃ。な、正治」

正治 「もうバツチリ」

教子 「調子のいい事ばり言ってる」

よしみ 「あんだも耳が痛いべ」

茂 「あんだだっけ飲むべっちゃ」

よしみ 「私はたまにでしょ、あんだは毎日だべ」

教子 「高橋家はみんな飲むの。おとさんもこの通りでしょ、明実も誠一もこてこてになるまで飲むんだから」

誠一 「なに話してんの？」

教子 「あんだら酒癖悪いってさちこさんに教えてんだ」

誠一 「あんまり変なこと言うなよ」

教子 「さちこさん、迷惑かけてない？」

さちこ 「迷惑じゃないですけど、心配はしてます」

よしみ 「何したの？」

さちこ 「飲み会に行つてなかなか帰つて来ないなあつて心配してたら、酔つて道路に寝てたんです」

教子 「あんだ馬鹿でねーのが、轢かれて死ぬんだど。あんだはいいいけど運転してた人が可哀そうだべ」

誠一 「大丈夫だ。歩道の脇の植え込みのところだったから」

教子 「そいな問題でねーんだど」

なつよ 「迷惑かけんすなよ」

誠一 「わかつてます」

教子 「何回言つてもわかんねんだ、誠一もこの人も」

誠一 「望も気をつけるよ。高橋家の血をひいてるんだからな」

教子 「血、関係ねーべっちゃ。じいちゃんも新造おんちゃんも飲み方きれいだべ」

よしみ 「じゃあ、誰に似だんだべ」

誠一 「俺が酒にだらしないのは親譲りだがらな」

勝男 「冗談は休み休みに言いなさいよ」

誠一 「冗談でねーべっちゃ。夜中、ガダガダガダーつて階段がらころげ落ちる音で起きつとや、おとさんが酔つ払つて階段の下で倒れでだりや、飲み過ぎで漏らしてパンツ川さぶん投げできたりな」

さちこ 「漏らして？」

教子 「小でないの、大のほうだよ」

さちこ 「えー」

正治 「腹の調子悪がったんだよねあん時」
勝男 「そいな話しなくていいべっちゃ」
教子 「だったら飲まなければいいべ」
正治 「そうもいがないんですよ、勝男さん町内のリーダーだから」
教子 「何がリーダーなの！飲み会のリーダーでしょ。夕方になると誘いの電話がくるの、仲間から」
さちこ 「友達が多くていいじゃないですか。うちの父親も消防団の仲間と毎日飲んでましたよ」
正治 「お父さん消防団？ なんだが話合いそうだなや」
勝男 「正治も消防団なんだ」
さちこ 「そうなんですか。今度父が宮城に来たら一緒に飲んでください」
正治 「歓迎会やんねどね、勝男さん」
勝男 「んだな。パーツとやっぺ！」
よしみ 「まだ飲み会の話？」
教子 「んだ。いつまでたっても懲りねえんだ」
茂 「それぐらい、いいんじゃないですか」
教子 「何がそれぐらいなの」
勝男 「でも考えんだよおかさんも、妨害作戦」
教子 「なに？」
勝男 「子供ば使うんだ」
正治 「あれにはまいったな」

勝男 「子供ばスナックまで迎えにこさせんだ」

さちこ 「えー」

教子 「そうでもしないと帰って来ないんだよ」

誠一 「迎えに行くと小遣いもらえっからや」

さちこ 「え？」

勝男 「卑怯なんだがら」

望 「ひきょうなの？」

教子 「ううん、頭がいいの」

誠一 「けど、二回目三回目になつとや、ジュース飲むが？なんか食うが？って買収されんだ」

さちこ 「お父さんもお父さんですね」

教子 「正治さんも止めないのが悪いんだよ」

正治 「まいったなや、とぼっちりだ」

教子 「とぼっちりでねーべっちや。おとさんがこいなんだがら子供も飲んべえになつたんだよ。正治さんにも責任あるんだからね」

誠一 「親の背中ば見で子供は育つからな」

勝男 「俺のせいが？」

教子 「んだっちや。全部あんだのせい」

勝男 「はいはい。どうもすみませんでした」

なつよ 「誠一、あんまり飲むすなよ」

誠一 「わかりました」

なつよ 「正治さんもほどほどにすさいん」

正治 「了解しました！」

なつよ 「勝男もな」

勝男 「はいはい」

なつよ 「はいは一回でいいの」

勝男 「はい」

☪ カモメの鳴き声

海からの一陣の風が、桜の花びらを散らす。

新造 「体も温まったし、そろそろ戻っかな」

兵吉 「どごさ戻んの」

新造 「釣りっこ」

よしみ 「おんちゃんも好きだなや」

新造 「いい風吹いできたがらや」

釣り道具を持って去りかけ

新造 「兄貴、みんなで飲めて楽しかった」

兵吉 「あー」

新造 「勝男、・・・最期の時はいろいろ世話になった」

勝男 「私は何も。教子がいろいろ気にかけてやってたんです」

新造 「何から何まで助かった。ありがとな」

教子 「いえ何も」

新造 「・・・んでな」

なつよ 「また寄ってけさいん」

新造 「誠一、嫁さんば大事にしろよ」

誠一 「はい。・・・おんちゃん!・・・」

新造 「んでな」

一人去る新造。

よしみ 「おんちゃん早くに奥さん亡くしてっからな、気になるんだべ」

教子 「再婚でもすればよかったのね。子供もいなくて寂しかったべ」

勝男 「真面目な人だったからな」

正治 「さて、おらも奥さんの機嫌伺いに戻っかな」

勝男 「まだ大丈夫だべ?」

教子 「あんだがそうやって止めるがら正治さん家に帰らんねんだど。正治さん、この人のこと

無視して帰ってください。奥さんも待ってるべから」

よしみ 「その方がいいよ。兄さん飲みでーだけだから」

なつよ 「正治さん、いつもありがとね」

正治 「なーに、いつもご馳走になって、こちらこそありがとうございます」

教子 「少し持っていったらいいちゃ。どうせあますんだから」

タッパーに料理を詰め、渡す教子。

正治 「いつもすいません。誠一君、みんな応援してっからな。頑張れよ」

誠一 「ぼちぼちね。正治さんも元気で」

正治 「さちこさん、お父さんにいつか消防団同士で飲みましょうって」

さちこ 「はい、伝えておきます。父も喜ぶと思います」

正治 「兵吉さん、お先です。んで」（歌を歌いながらハケる）

勝男 「寄り道すんなよー！」

誠一 「正治さん、変わんないね」

勝男 「あんだは変わったな」

誠一 「？」

勝男 「ずいぶん丸くなった」

誠一 「丸くなったのが良いのか悪いのか・・・」

㊦ カモメの鳴き声（遠く）

よしみ 「どれ、あだしらもお暇すつかな」

教子 「まだいいべっちゃー」

よしみ 「この人もだいぶ酔って来たがらや」

茂 「まだまだ飲めつぺっちゃ」

よしみ 「飲める飲めないでなくて、それ以上酔われだらこつちが困んだ」

茂 「まだ酔ってません」

よしみ 「酔ってつぺっちゃ。しっかりしてけさいん」

足元が危うい茂。

誠一 「おんちゃん大丈夫？」

茂 「大丈夫だあ」

よしみ 「いいが、結婚したらな、あんだはさちこさんの家に気を遣う、さちこさんは高橋家に気を遣う。それが上手くいくコツだがらな」

誠一 「わがった」

よしみ 「いつまでも一人もんの気分で好き勝手できねんだがらな」

誠一 「わがってます」

よしみ 「ホントにわがってるのが？」

誠一 「わがってるって！」

よしみ 「さちこさん、宜しく頼みます」

さちこ 「はい」

よしみ 「誠一、息子の淳のこと、気にかけてやってける」

誠一 「うん」

茂 「俺ら居なくなっただけ一人だからや、すみませんけど宜しく頼みます」

誠一 「はい。分かりました」

よしみ 「一人っ子だからや、兄弟のつもりで付き合っけてる」

誠一 「うん」

よしみ 「んでな」

去るよしみ、茂。

SE カモメの鳴き声 (近づく)

勝男、慰霊碑を見ながら、

勝男 「この慰霊碑の前で写真撮ったんだ中学校の同級生ど。あの写真どごさいったがな」

教子 「分がる訳あんめっちゃ、流されだんだもの」

勝男 「海さ行った帰りにや、海パンのまま並んで撮ったんだ。どこさいったがなあ」

誠一 「・・・もう終わりなの？」

勝男 「んだな」

誠一 「なんで出てきたの？」

教子 「理由なんてないでしょ。私らもあんだ達とお話したいんだから」

なつよ 「お嫁さん、どんな人がなあってや」

さちこ 「すみません、何を話したらいいのか分からなくて」

なつよ 「いいの、ちゃんと分かったがら」

勝男 「父さん、何が話しておくことないですか？」

兵吉 「うん・・・。体に気をつけでな。家の事、頼むど」

誠一 「・・・うん」

勝男 「あんだらに何も残すことできなかったなあ。先祖から代々受け継いできた物もあったんだけどな。みな流されだ」

教子 「大したものあんめっちゃ」

勝男 「何言ってるの、みんな集まる時使ったお膳とか皿はいいもんなんだよ」

教子 「ただ古いだけでないの」

勝男 「馬鹿言うんすな。代々使ってきたっていうところが大事なんですよ」

教子 「はいはい」

勝男 「これからは兄弟で助け合いなさい。最後は血の繋がりなんだがら」

誠一 「うん」

教子 「お姉ちゃんに言っておいで。望ば助けであげられなくてごめんねって」

勝男 「なんとか望だけはって頑張ったんだけどな、駄目だった。申し訳ないって」

教子 「ママとパパに言っただけいいことある？」

望 「ケンカしたり泣いたりしないですって」

誠一 「うん。言っておぐがら」

教子 「お姉ちゃんの明実も、弟の武志もあいなんだがら、あんだがしっかりして下さい」

勝男 「さちこさん、頼りないけど、誠一の事、宜しくお願いします」

教子 「思ってることなかなか口に出さないからイライラすることもありますが、仲良くやってください」

さちこ 「はい」

勝男 「誠一もさちこさんのこと、大切にすさいよ」

誠一 「うん」

教子 「お願いします」

さちこ 「こちらこそ。ずっと見守っていて下さい」

勝男 「しっかり見ときます、だいぶ眼悪くなったけど」

教子 「おかしなことしたら枕元に立つがらな」

誠一 「心臓止まっからやめでけろ」

勝男 「母さん、何か言っとくことないの」

なつよ 「もうこっちは戻ってこねーのが」

誠一 「ん・・・」

教子 「この町が嫌で出て行ったんだべがら」

勝男 「何が嫌だったのや？俺たちが悪がったのが？」

誠一 「んだごどねーよ、俺が悪いんだ。好き勝手ばりして」

勝男 「まー、戻りたくなったら戻ってくればいいんだ」

教子 「何言ってるの！家ないんだよ、もう」

勝男 「あー、忘れた」

教子 「今度は二人で高橋家を作っていがいん」

勝男 「久しぶりに楽しい時間を過ごさせてもらった。ありがとね」

SE カモメの鳴き声（重なり合う）

勝男 「元気だな」

誠一 「迷惑ばかりかけて悪がったな。何やっても中途半端でや、剣道やっても途中で辞めて、サッカー始めてはすぐ辞めて、大学行くって言っては勉強足りなくて結局ダメ。そしてせっかく口きいてもらった会社も二年で辞めた。期待ば裏切りっぱなしだった」

勝男 「気にすることね」

教子 「だったら今の仕事、中途半端にならないように頑張りなさい」

兵吉 「辛抱と努力。短気は損気だからな」

誠一 「・・・はい」

勝男 「んでな」

誠一 「・・・」

なつよ 「バイバイって」(望をうながす)

望 「バイバイ」

さちこ 「また遊ぼうね！」

望 「うん！」

大きく手を振る望、勝男、教子、兵吉、なつよ。

浜風が家族の間を吹き抜ける。

勝男 「この風だ。この風の向こうに、おら達は居っからな！」

SE カモメの大群の鳴き声から波の音へ

夕景。

河口の岸壁で釣りをしている新造。そこにやって来る正治。

正治 「のどかですね」

新造 「あー」

正治 「いつ時は、政治家だ芸能人だボランティアだって騒がしがったがらね」

新造 「んだな」

正治 「有名になったおんねこの町も」

新造 「こいなんでも有名になってもな・・・」

正治 「でも、どんなに変わっても生まれ育った町はいいね」

新造 「んだな」

正治 「あそこに水門あつてさ、こっちには消防署と向かいにスナックがあつてね。よく飲みさ
行つたんですよ」

新造 「酒の話ばかりだな」

正治 「なんだや、飲みにケーションは大事なんだよおんちゃん」

新造 「邪魔すんだつたら、早く家に帰ればいいべ」

正治 「早く帰つたら帰つたで文句言われんだがら」

浜風がゆつくり河口を渡っていく。

新造 「いい風吹いできたな」

正治 「あいな津波が来るとは思つてねがつた」

新造 「・・・」

正治 「力、足んねがつた」

新造 「一生懸命やったんだがら・・・」

正治 「・・・」

正治 「おんちゃん、生まれ変わるんなら何がいいですか？」

新造 「んだな・・・ 正治は？」

正治 「俺はね・・・虫は嫌だね。すぐ踏み潰されそうじゃないですか。鳥は食べる方がいいし、魚もな・・・一生水の中っていうのもね。水はもうたくさんだっちゃ」

新造 「じゃ、何になりでーの」

正治 「・・・やっぱり人間がいいね。出来れば、息子の子供とか孫の子供とか、身内のそばに生まれ変わりたいね」

新造 「んだな。家族のそばがいいおんな。もしかしたら、おら達も先祖の生まれ変わりだったのかもしれない」

正治 「俺が先祖の生まれ変わりで、また子供や孫、縁のある家族の子供として生まれ変わる。いいね」

新造 「繋がってんだ」

正治 「それまでこうやって待ってんのすか？」

新造 「俺に聞いたって分かるわけねーべ」

正治 「んだね。じゃーのんびり待ちますか、その時が来るまで」

溶暗。

了